初雪

禅鳳作

前

ヲカシ（女）　侍女夕霧

シテ　神主の娘

後

ツレ二人　上﨟達

シテ　鳥の霊

地は　出雲

季は　雑

ヲカシ「是は出雲の国の大社女六の宮に仕へ奉る。夕霧と申す女にて候。さても神主殿なる人の御料人を一人御持ち候ふが。みめかたち御心もいうにやさしく御入り候。去年の頃より庭鳥の子を人の参らせられて候ふに。形美しく白き鳥にて候ふ程に。初雪と御名付け候ひて。殊の外寵愛にて候。今朝はいまだ鳥屋を見ず候ふ程に。見ばやと思ひ候。此鳥空しくなりて候。さて是は何と申すべきぞ去り

ながら。申さでは叶ふまじく候ふ間。やがて申さうずるにて候。いかに申し上げ候。御寵愛の初雪空しくなりて候。

シテ「何と初雪が空しくなりたると申すか。是は誠か。誠に空しくなりたるはいかに。こはいかにさしも手馴れし初雪の。跡をも見せで其まゝに。消えぬる事の悲しさよ。さればこそ過ぎにし夜半に見し夢の。心にかゝりし事ありしも。さては此鳥の身

の上なりけるぞや。あらむざんの事やな。

下歌地「うつゝとも夢とも更に思ほえず。

上歌「かくばかり。驚くべきにあらねども。〳〵。思ひかけざる嘆き故。胸の火はこがれて。袂は乾くひまもなし。今はかたみもあらばこそ。書きおく文字の姿まで。鳥の跡とてなつかしや。〳〵。

クセ地「むざんやな此鳥の。かひこを出でゝ程ふれば。其形妙にして。色はさながら雪なれば。やがて初雪

と名付けつゝ。影身の如く馴れ〳〵しに。恋路にあらねども。別れの鳥となりにけり。

シテ「今は思ふにかひぞなき。

地「嘆きをとゞめて。ひとへに心をひるがへし。弥陀のちかひを頼みつゝ。弔ふならば此鳥も。などかは極楽の。台の縁とならざらん。

シテ詞「いかに夕霧。さても初雪がふびんさはいかに。今は嘆きても叶ふまじ。此あたりの上臈達を集め。

一七日とぢ籠り。彼鳥の跡を弔はゞやと思ひ候。
其由ねんごろに申し触れ候へ。

ツレ二人「実に有りがたき弔ひの。〳〵。心もすめる折柄に。
鳧鐘を鳴らし声々に。南無阿弥陀仏弥陀如来。

地「あれ〳〵見よやふしぎやな。〳〵。中空の雲かと
見えつるが。雲にはあらで。さも白妙の初雪の。
翼をたれて飛び来り。姫君に向ひ。さもなつかし
げに立ち舞ふすがた。げにあはれなる気色かな。

後ジテ「此念仏の功力に引かれ。

地「この念仏の功力に引かれ。忽ち極楽の台に生れ。
八功徳池の汀に遊び。鳧雁鴛鴦に翼をならべ。七
重宝樹の梢にかけり。楽しみ更に尽きせぬ身なり
と。ゆふつけ鳥の羽風を立てゝ。しばしが程は飛
びめぐり。しばしが程は飛びめぐりて。行方も知
らずぞなりにける。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第一輯』大和田建樹 著